



胃がんについて

- ✓ わが国では50歳代以降に罹患する人が多く、がんによる死亡原因の上位に位置するがんです。
- ✓ 検診を受けることでがんによる、死亡リスクが減少します。
- ✓ 検診は2年に1度、定期的に受けてください。ただし、胃の痛み、不快感、食欲不振、食事がつかえるなどの症状がある場合は次の検診を待たずに医療機関を受診してください。
- ✓ 検診で「要精密検査」となった場合は、その後必ず精密検査を受けてください。
- ✓ 精密検査は胃内視鏡検査です。
- ✓ 検診では、がんでないのに「要精密検査」と判定される場合や、がんがあるのに見つけれない場合もあります。
- ✓ 検診は自治体と、各医療機関が連携して行っています。精密検査の結果は関係機関で共有されます。*

※精密検査の結果は市区町村へと報告されます。また、最初に受診した医療機関と異なる医療機関で精密検査を受けた場合は、最初に受診した医療機関にも後日精密検査結果が共有されます。(医療機関の検診精度向上のため)

「胃がん」「がん検診」などのがんの情報についてもっと詳しく知りたい方に、国立がん研究センターのがん情報サービスは、わかりやすく確かな情報をお届けしています。

国立がん研究センター
がん情報サービス

ganjoho.jp



つくるを支える
届けるを贈る

がん情報ギフト

国立がん研究センターは、皆さまからのご寄付で「確かな・わかりやすい・役立つ」がん情報をつくり、全国の図書館などにお届けするキャンペーンを行っています。ぜひ協力ください。

発行：国立がん研究センターがん対策情報センター
がん医療支援部 検診実施管理支援室 2021年4月
協力：厚生労働行政推進調査事業費補助金「検診効果の最大化に資する職域を加えた新たながん検診精度管理手法に関する研究」班

これから受ける検査のこと 胃がん検診



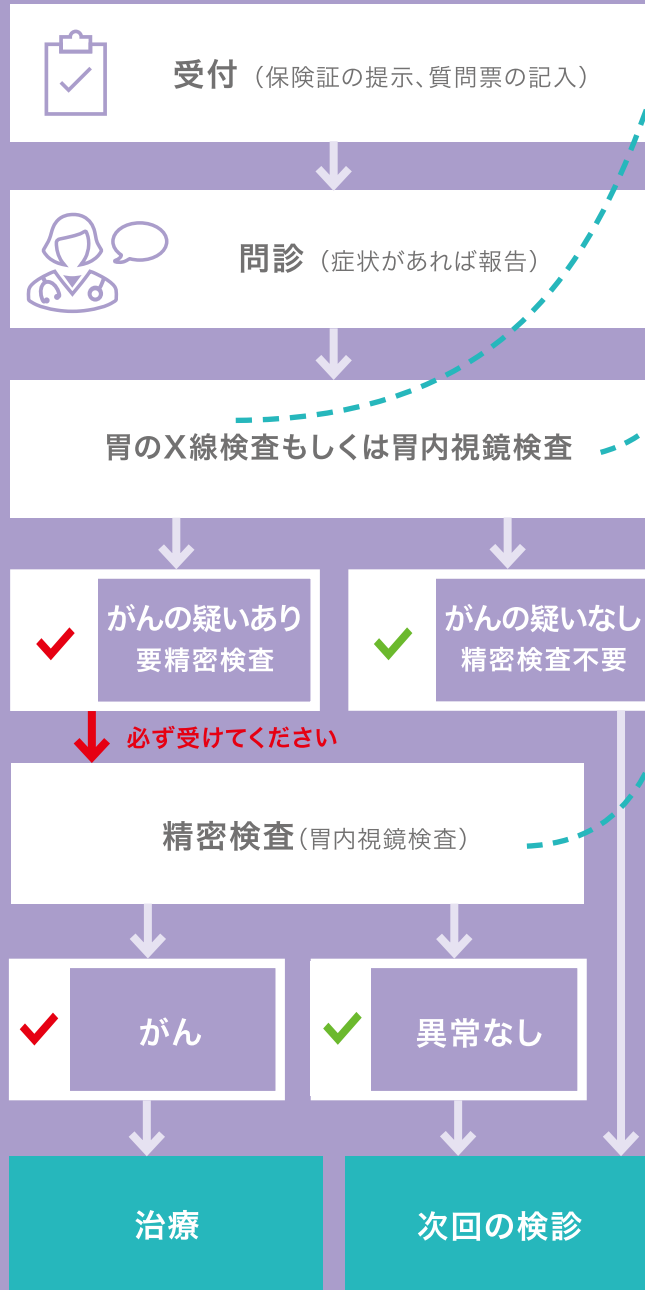
胃がん検診を受ける前に...

胃がん罹患する人(かかる人)は50歳代以降に多く、わが国のがんによる死亡原因の上位に位置するがんです。自治体で推奨している胃がん検診(胃のX線検査、胃内視鏡検査)は「死亡率を減少させることが科学的に証明された」有効な検診です。早期発見、治療で大切な命を守るために、50歳以上の方は2年に1度定期的に検診を受診し、「要精密検査」という結果を受け取った場合には必ず精密検査を受けるようにしてください。

すべての検診には「デメリット」があります。がんは発生してから一定の大きさになるまでは発見できませんし、検査では見つけにくいがんもありますので、すべてのがんががん検診で見つかるわけではありません。また、がんでなくても「要精検」と判定されたり、放置しても死に至らないがんが見つかったために不必要な治療を受けなければならない場合もあります。さらに、検査によって出血などが起こることがあります。

しかし、胃がん検診はこれらの低い確率で起こるデメリットよりも、がんで亡くなることを防ぐメリットが大きいことが証明されているため、必ず定期的に受診してください。

胃がん検診の流れ



胃のX線検査

発泡剤(胃を膨らませる薬)とバリウム(造影剤)を飲み胃の中の粘膜を観察する検査です。

胃内視鏡検査

口または鼻から胃の中に内視鏡を挿入し、胃の内部を観察する検査です。

- 検査当日は朝食が食べられません。
- 常用薬、アレルギーがある場合はご相談ください。
- 胃のX線検査ではバリウムで便秘になったり、腸内で詰まって腸閉塞を起こすことがあります。また過去にこの検査で問題があった方、手術を受けて1年以内の方、水分制限を受けている方はご相談ください。
- 胃内視鏡検査では胃の動きを抑える注射や、喉の麻酔を行います。

精密検査は胃内視鏡検査

胃のX線検査後の精密検査は、胃内視鏡検査を行います。検査で疑わしい部位が見つければ、生検(組織を採取し、悪性かどうか調べる検査)を行う場合もあります。

- 検診で胃内視鏡検査を受けた場合、精密検査は、検診時に同時に行う生検や、胃内視鏡検査の再検査となります。



検診は50歳以上、2年に1度受けることが大切です

胃がんの中には急速に進行するがんもあります。早期発見のために必ず2年に1度、定期的に検診を受けてください。胃の痛み、不快感、食欲不振、食事がつかえるなどの症状がある場合には次の検診を待たずに医療機関を受診してください。